博 士 学 位 論 文 要 約

論 文 題 目： 生を縁取る言葉の居場所―戦後沖縄における「島ぐるみ」土地闘争の再検討―

氏　　名： 岡本　直美

要　　約：

本論は、沖縄戦後史のなかで、全沖縄的な反米軍基地闘争「島ぐるみ」土地闘争や、復帰運動、反戦平和運動の源流と位置づけられた伊江島土地闘争から、人びとが希求する自律的な生を縁取る言葉の居場所を考察することを目的とした。このような言葉の居場所は、沖縄戦後史における重要なテーマの一つでもある自治希求の問題とも深くかかわる。つまり、「わたし」や「わたしたち」という言葉がいかなる場面において構成され、いかなる文脈で発せられるかという問いである。そのことを念頭に置いて伊江島土地闘争に関わる人びとの生の営みについて考察した。各章の要点は以下である。

第１章では、〈土地に根差した農民による土地闘争〉という認識を問う作業を行った。伊江島土地闘争は、沖縄戦後史のなかでは「抵抗する主体」として位置づけられてきたが、被土地接収者たちは常に流動的な生に晒されながら闘った。したがって本章では、住民たちが土地を守る根拠として何を提示したのかを探るため、人びとの移動経験に注目した。

戦前から移民や出稼ぎ者が多く、さらには深刻な地上戦を経験した沖縄では、定住を前提に人びとの生を捉えること自体が難しい。伊江島の土地には住民の様々な移動経験が重ねられ、土地闘争時に各自の移動経験が想起され、参照されて運動へ反映される点が特徴的である。そのため、固定的に認識される傾向にある「土地」と、流動的な「人びとの生（移動経験）」を同時に検討する必要があると考えた。

沖縄の移民史研究には膨大な蓄積があり、地域誌による証言収集も精力的に行われてきた。一方で、土地闘争史も沖縄研究における主要なテーマの一つであり、運動資料も多く検討されてきた。しかしながら、沖縄に生きる人びとのライフヒストリーにおいては、両者は接続するものであるにもかかわらず、従来の研究では移民史研究と土地闘争史研究との連関が充分に検討されてきたとはいえない。そこで、人びとのライフヒストリーから土地闘争を考察する方法論的な検討のため謝花直美「復興都市の異音」と平松幸三『沖縄の反戦ばあちゃん』を手がかりとした。

第２章では、土地収用が潜在的な問題である時点において、住民たちがどのような政治の場を構築したのかを検討した。住民たちの陳情方法は、当初から戦略であったわけではなく、米軍や琉球政府役人に直接交渉するようなたたかいの経験の中でつくり出されたものであった。経験を重ねて、陳情文を作成するようになり、沖縄本島の街頭で訴えるようになった。離島であること、さらに伊江島の演習地は米空軍の管轄であるという理由で、陸軍管轄である伊佐浜など沖縄本島の他の接収地とは問題を扱う窓口が、最初は異なって

いたため、孤独ななかで殺されないために陳情文や折衝で「宣言」を行った。「宣言」は、問答無用の暴力や尊厳を認めない支配層側の論理に対して、それでは自律的な生を営むことができないと明言した意思表示である。伊江島住民による「宣言」を詳細に取り上げ、暴力と言葉が一体となっている領域を注視することで、暴力に抗する可能性を人びとがつくり出す過程を明らかにした。

第 3 章では、武力を伴った土地の強制収容が、潜在的な問題から現実の問題として実行された後を研究対象とした。接収の前後で決定的に異なるのは、住民たちが「生きる」という語を前面に押し出した点である。強制収容が潜在的な脅威である時点では、被接収者は「決死の覚悟」や「死んでも立ち退かない」など、“死”という語を用いて生きるための条件を主張した。しかし、強制収容が現実となり、実際に今日食べるものすら収奪されたような状況に置かれた人びとは、「生きるため」という語で宣言や要求事項を伝えるようになる。したがって、暴力の事後においては、飢えが予想ではなく現実の問題となり、毎日を生きるという最重要課題を根拠として生活補償が折衝された。一方で、被接収者たちは、将来も飢えないように、自律的な生を営むことのできる土地を確保するため、恒久補償も訴えた。

先行研究では抵抗の象徴としてみなされてきた伊江島土地闘争であるが、伊江島の声が沖縄の他の住民に広がる一方で、軍事暴力による土地の強制収容の問題は、「軍用地問題」としてではなく、「社会の問題」として扱われるように変化した。つまりそれは、被接収者を被救済者とみなす政治へと変化するような状況であった。このような展開をしたのは、軍用地被接収者を補償する予算を持たない琉球政府が、人びとの飢えをなんとかしようと臨時予算から費用を捻出しようとした結果でもある。そして、予算の承認は米軍が行っている。つまり、制度が整えられていないなかで、生き延びるための費用をどこから出すのかという模索のなかで、伊江島の被接収者は被救済者となった。その模索は、軍用地接収に抗する伊江島の声が大きくなり、沖縄本島に浸透するなかで、伊江島の声を押さえようとした米軍の判断とも大きく関わっていたことを明らかにした。

第 4 章では、ポスト「島ぐるみ」期に伊江島土地闘争でどのような「わたしたち」が構成されたのかを考察した。伊江島の運動は復帰運動（1960 年代後半～）で重視されるにもかかわらず、沖縄戦後史で取り上げられるのは主として「島ぐるみ」闘争前に留まり、その後の伊江島闘争を検証する研究は乏しい。だが、スクラップ収集や農耕中に爆死者や被弾者が出るなど、軍用地に対する補償が制度化された後も、軍隊によっていつ殺されるか分からない生活が無くなったわけではなかった。本章では「伊江島土地を守る会」（1961-）に注目し、該当時期の運動経験を分析した。ポスト「島ぐるみ」という、運動が収束と分裂を経験する状況下で、当会は積極的に本土の支援者との交流、後継者の育成（東京・中央労働学院や京都・一燈園に派遣）に努め、自分たちで学習会を開くようになった。当会の「学習」は、新たな知識を得るという意味以上に、自分たちの運動を自己把握し、運動を事後的に意味づける作業としてあった。同時に学習は運動を継続する場を確保する行為でもあった。

伊江島土地を守る会の特徴は、「自」という問題をあえて抱え込んだ点にある。それは、復帰運動の中枢から姿が見えなくなることにも表れているだろう。契約地主であるか

契約拒否地主であるかといった判断基準で集団を構成し、「自」を掲げるのではなく、戦後ずっと生き延びてきたといいう究極の事実に基づいて「自」をつくり上げ、集団を構成する手段をとった点を明らかにした。

第 5 章では、空間や建物といった「場」を通して、現在的な文脈において伊江島の反戦平和運動と反戦平和資料館を考えた。それは、動態的な営みである「運動」と、建物として定点に在る「資料館」を切り離すことなく、反戦平和運動に関わる人びとの行為を場から総合的に捉えることで、反戦平和の実践の場がどのように創造されたのかを探る作業である。伊江島土地闘争は多様な場でつくられ・記憶されてきたが、その一つに「わびあいの里」（1984 - ）があり、第 4 章で取り上げた学習の場の最終地点でもある。先行研究では、わびあいの里は主として反戦平和資料館に焦点が当てられ、阿波根の反戦平和思想の集大成として紹介されてきた。しかしながら、当資料館は、阿波根独自の思想が表現されていると同時に、資料館を通して複数の人びとの生の痕跡が物語として浮かび上がる場でもある。

当資料館の展示物の特徴は、一つ一つが戦争や土地闘争の証拠品であり、それらの証拠品には一人ひとりのライフヒストリーが物語とともに遺っている点にある。そのような証拠品は、無名かもしれないが誰かにとってのかけがえのない人の生きた痕跡を刻むものであり、そのように一人ひとりの生を縁取るような証拠品は「ガラクタの山」となることで、問答無用に大量の人間を殺した戦争そのものの加害性を決して無かったことにはさせない力をもった。そして、天皇の戦争責任が問われないまま復興した日本、なぜ自身が沖縄戦で大切な人を失いその状況を自身が生き延びたのかという説明責任をどの権力もが果たさないような戦後を問題化した。わびあいの里の資料館では、沖縄戦を記憶として遺していく作業のなかで、慰霊し、戦争を生き延びた自身を語りうるような「わたしたち」の空間ができたことを浮かび上がらせた。

第 6 章では、運動という動態的な営みを、定点観測的な方法ではなく、人びとが集う場、そこを支えてきた人物から考察した。どのような人びとが運動を支えたのか、どのような人びとが集ったのか。そして、運動はいかなるなかで生成され続け、記憶されてきたのか。前章ではそれを建物から考察した。本章では、同様の問いを筆者自身も含めてよりパーソナルな場から考えようとした。

筆者の現地調査の経験を踏まえて、聞き取りについて考察している。おしゃべりによって生の言葉を聞き取るということは、話者が語る歴史の根拠や論理を知ることでもある。歴史学者の保苅実によれば、「「正しい道」すなわち倫理は、正しい行動規範や態度という意味だけではなく、維持されている世界についての物理的証拠という意味である点は重要である」 。したがって、聞き取りという名のおしゃべりは、制作された歴史には登場しないような生の言葉と暴力に抗する論拠を現実の問題として顕在化させるような、言葉の居場所なのである。この居場所は、人間の尊厳を保つことができるような場として存在すべきであり、歴史（記述）はこれらを傷つけて良いものではけっしてないという所感を筆者の経験を通して記した。

さいごに終章は、今後の展望として、本論文で考察したような「自」が、沖縄の重要なテーマの一つである自治や独立の問題と接続する可能性について記した。